



感動詞による感動について

著者	六城 雅章
雑誌名	日本文藝研究
巻	72
号	2
ページ	199-220
発行年	2021-03-30
URL	http://hdl.handle.net/10236/00029447

感動詞による感動について

六 城 雅 章

一 はじめに

「感動詞」という用語は、感動・呼掛・応答といった意味を表わす語類の総称として使用されるのが一般的であるが、本稿では、そのような総称としてのものを「広義感動詞」と呼び、その「広義感動詞」の下位類として、感動・呼掛・応答に使用される語類を、それぞれ「感動詞」「呼掛詞」「応答詞」と呼ぶ⁽¹⁾。本稿は、文法論の観点から、一般に感動詞による感動の例とされる「ああ、雨だ。」「えつ、雨？」のような文の体系について論じるものである。

二 広義感動詞による文の特徴

拙稿（二〇二六）は、森重（一九五九）・大鹿（一九八八・一九八九）の論を受けて、広義感動詞を「それ自体が独立して一つの完全な文となり得る」「対象的意味を積極的に欠如した態勢においてもち作用的意味に卓越している」という二つの文法的特徴をとともに満たすものとして規定する。本稿は、この規定を踏襲するものである。また、拙稿（二〇二〇）が述べるように、広義感動詞は、「対象的意味を積極的に欠如した態勢においてもつために、個々の場面

の中に置かれてはじめて機能し、意味をもつ」ものであり、ここから「一つの語が様々な機能や意味を有することになる」。たとえば「さあ」という広義感動詞が「さあ、大変だ。(感動)」「さあ、行け。(呼掛)」「さあ、知りません。(応答)」のように様々に使用されるのは、このためである。

広義感動詞による句が文をなす際には、その欠如した対象の意味が補填されなければならない、これには、現場によりかかることによってその補填を行なう場合と、広義感動詞句に相前後する句の対象的意味を取り込むことによってその補填を行なう場合との二つがある。広義感動詞による文は、前者にあつては「ああ。」のように広義感動詞句のみで一文をなし、後者にあつては「ああ、雨だ。」「雨だ、ああ。」のように広義感動詞句とそれに相前後する句との二句で一文をなす。このように、一句一文と二句一文との二つの構造をもつことが、広義感動詞による文の特徴である(以上、大鹿(一九八八・一九八九)・拙稿(二〇一六)を参照)。

三 個々の感動詞・呼掛詞・応答詞がもつ性質

文には、聞き手を必要とするものと聞き手を必要としないものがある。広義感動詞による文の代表的なものである感動・呼掛・応答について、呼掛詞による呼掛および応答詞による応答は聞き手を必要とする文であり、感動詞による感動は聞き手を必要としない文である⁽²⁾。

呼掛詞による呼掛および応答詞による応答は、聞き手を必要とする、すなわち「人」が「人」に対して発する文であり、言語場において「人」と「人」とが話し手・聞き手として対峙するとき、そこには、話し手(呼掛・応答の主体)としての「人」がもつ年齢・性別といった属性の分化と、「人」と「人」との間の上下・親疎・公私といった待遇の分化が発生する。そしてここから、個々の呼掛詞および応答詞は、それぞれに属性・待遇の分化から生じる独

自の性質をもつことになる。たとえば、浅田（二〇一七）は、呼掛詞「おい」について「主に男性が親しい相手や目下に対して用い、女性は用いない傾向にある」と記述し、応答詞「ああ」について「男性が対等以下の相手に対して用いる」と記述するが、これらの性質は、右に述べた属性・待遇の分化から生じるものである⁽³⁾。

他方、感動詞による感動については、聞き手が必要としない文であるために、「人」と「人」との間の待遇の分化が発生せず、話し手（感動の主体）としての「人」がもつ属性の分化のみが発生する。また、それゆえに、個々の感動詞は、それぞれに属性の分化から生じる独自の性質をもつことになる。たとえば、浅田（二〇一七）は、感動詞「きゃ」について「主体は若い女性であることが多い」と記述するが、この性質は、右に述べた属性の分化から生じるものである。

四 感動・呼掛・応答の「条件」

大鹿（一九八九）は、広義感動詞による感動・呼掛・応答について、次のように述べる。

これらの語〔引用者註…感動詞・呼掛詞・応答詞〕が対象的意味を積極的に欠如させたままやがて補填される態勢として持っているため、それらが実際に用いられる現場に拠りかかってしか文とはならないことを述べておいたが、拠りかかるべき現場にあつて最低限必要な条件がそれぞれに異なる。すなわち呼掛詞では呼び掛けるべき相手、応答詞では肯ない、否定し、保留しなどつまりそれに応答すべき判断、そして感動詞にあつては感動し、詠嘆し、驚嘆する対象たる事態、これらの存在をそれぞれの基本的な条件とすることが出来よう。もちろん話し手の側にあつても、これらに対応すべき条件、即ち呼掛けの前提たる呼び掛ける目的、応答の前提たる応答のための知識、感動の前提たる事態の把握などがなければならぬことはいうまでもない。

	現場の条件	話し手の条件
呼掛け	相手	目的
応答	判断	知識
感動	事態	把握

ここで「現場の条件」とされるものは、感動・呼掛・応答の対象である。また、感動・呼掛・応答において使用される感動詞・呼掛詞・応答詞の使いわけは、それぞれ、ここで「話し手の条件」とされる「把握」「目的」「知識」の在り方との対応をもつと考えられる。以下、呼掛詞による呼掛および応答詞による応答の「条件」について、本稿の解釈を述べる。

まず、呼掛詞による呼掛について。呼掛の対象が「相手」であることは、説明不要であろう。拙稿(二〇一六)は、呼掛詞を、「〈我〉―〈汝〉」の言語場を構成する「機能のみをもつ」「典型的な呼掛詞」である「第一種呼掛詞」と、「〈我〉―〈汝〉」の言語場を構成する「機能のうえに」「指示」「気付け・思い出させ」「促し」という機能が加わった「周辺のな呼掛詞」である「第二種呼掛詞」とにわけ、前者の例として「あの」「おい」「おう」「すみません」「ちょっと」「なあ」「ねえ」「のう」「もし」「やあ」「やい」「よう」を、後者の例として「いざ」「さあ」「そら」「それ」「はい」「へい」「ほい」「ほら」「ほれ」を、それぞれ挙げる⁽⁴⁾。そして、「第二種呼掛詞」が命令・勧誘・気付けなどを目的とする場合に限って使用されるのに対して、「第一種呼掛詞」はより広く、それ以外のはたらきかけを目的とする場合にも使用される。ここから、呼掛詞の使いわけが話し手の「目的」の在り方との対応をもつ、と考えることができる。

次に、応答詞による応答について。拙稿(二〇一八)は、その体系を次のようにまとめる⁽⁵⁾。

〈文〉には、〈行為的意味〉と〈内容的意味〉との二つの側面がある。応答詞による応答は、これら二側面のそれぞれに対して行なわれ、〈行為的意味〉のみに対する応答を表明する場合（一類）と、〈行為的意味〉と〈内容的意味〉との両方に対する応答を表明する場合（二類）とに大別される。一類の応答においては、応答詞の使いわけがなされず、「はい」系の応答のみが可能となる。これに対して、二類の応答においては、応答の発話を行なうこと自体によって〈行為的意味〉に対する〈受容〉が表明され、〈内容的意味〉をめぐる応答詞の使いわけがなされる。すなわち、〈内容的意味〉について応答の主体が必要な情報を今現在所有しており、〈内容的意味〉に対する〈同意〉を表わす場合には「はい」系の応答が行なわれ、〈内容的意味〉について応答の主体が必要な情報を今現在所有しており、〈内容的意味〉に対して「いいえ」系の応答が行なわれ、〈内容的意味〉について応答の主体が必要な情報を今現在所有していない場合には「さあ」系の応答が行なわれる。

応答の対象が「判断」であるとは、すなわち、応答詞による応答が「〈文〉」に対して行なわれることを指すものと解釈できる。また、「二類」の応答における「はい」系・「いいえ」系と「さあ」系との使いわけが、応答の主体が必要な情報を今現在所有しているか否かを基準することから、応答詞の使いわけが話し手の「知識」の在り方との対応をもつ、と考えることができる。

以上、呼掛詞による呼掛および応答詞による応答の「条件」について、本稿の解釈を述べた。以下では、感動詞による感動について、「事態」を対象とし、感動詞の使いわけが話し手の「把握」の在り方との対応をもつ、という立場から分析を行なう。

五 感動と問掛との区別

感動詞は、一般に、気付き・驚愕・安堵・落胆・疑問などを表わすといわれる。次の(1a~d)は、それぞれ、気付き・驚愕・安堵・落胆を表わすといえる例であり、(2a~d)は、疑問を表わすといえる例である(なお、これらの例の本稿による解釈については、後に改めて述べる)。

(1) a (雪が降っているのに気付いて) あら 雪…(『少』七⁽⁶⁾)

b 「おおつ、血を吐かれた」諸人は驚いて、彼の体をかかえ上げ、山の下へ運んで行ったが、周瑜は氣を失つてしまったものらしく途中も声すら出さなかった。(『三』)

c (昼寝をするから静かにしてほしい、と母親が息子に頼む場面) 「だからなるべく静かにしててね」「うん」「ふう やつとわかつてくれたみたい」(『ク』二)

d 「時間が後れると霧が晴れてしまう」と熊八氏が心配していたが、山路が開けて一帯の谷を見渡した時に、「ああ霧はもう晴れている」と落胆した。(『別』)

(2) a (死んだはずの母親の姿を見かけて) あ…? お…おふくろ…? (『犬』二)

b すると、どこからか、何かしきりに話をしているような声が聞える。「はてな、誰だろう?」と、佐々は廊下に立ちどまって耳をすました。(『火』)

c 「——ちよつと、達郎! そんなにガツガツ食べないでよ」「ん? 何か言つた?」(『危』下)

d (大音量の音楽が流れているディスコで)「おい、困るよ。どうやって踊つたらいいかよく知らないんだ」「えっ? 何て言つたの? 聞こえないわ」(『脳』)

(1a~d) を、聞き手を必要としない文である「感動」の例と考えることは、問題ないであろう。これに対して、(2a~d) のような疑問を表わす例については、様々な解釈がなされている。第一に、疑問の例を「感動」の一種とする解釈がある。これは、最も一般的な解釈であり、「疑問」を、「気付き」「驚愕」「安堵」「落胆」などに並ぶ意味として位置づけるものである。第二に、疑問の例を「呼掛」の一種とする解釈がある。森重(一九五二・一九五九)はこの解釈を採るものであり、森重(一九五九)は、次のように述べる。

たとへば「——。え?」のように、汝の文を理解しえないところから、それをいま一度自覚的に合入し自身を「確立」しようとして、汝に呼掛ける〈反問〉の場合がある。これが(4)〔引用者註…応答詞による応答〕の前文を汝としての断絶的側面の抽象であることは明らかである。「——。はてな?」のような自問は、この汝の前文が、吾れの文脈乃至言語場となった場合であつて、同類である。

第三に、疑問の例のうち先行する発話に対してなされるものを「応答」の一種とする解釈がある。たとえば、森山(二〇一四)は、「応答とは、広義には、発話交換構造において先行する発話に対する言語的反応(態度の表明)である」としたうえで、「理解不能という反応で再度聞き返す応答」の例として「え?」「は?」を挙げる。

疑問の例は、このように、感動・呼掛・応答と様々に解釈されている。とはいえ、その一方で、これを「疑問」とみる点は共通しているといつてよい⁽⁷⁾。疑問文について、大鹿(一九九〇)は、次のように述べ、「疑いだけで問いのないもの」は「原理的にありえない」として、疑問文は必ず「問い」をもつと論じる。

・個人的な心理からいえば、問うつもりもない、ただの疑念の表明にすぎない表現もあり得るであろうし、実際の言語場において自問でさえないようなつぶやきと解釈する方がよい場合もあろう。しかし、それはこういう言い方が許されるなら、文法の問題ではない。

・ 勿論実際の表現の場で、問いという意味があらわにならないこともあるであろうが、それは決して問いという機能がないということではなく、さらに疑いの、文としての構造に、問いが組み込まれていないということを意味しない

これを踏まえて、本稿では、疑問の例を、「事態」を対象として聞き手に問い掛ける——話し手自身を聞き手とする場合（自問）を含む——文、すなわち、行為として「感動」ではなく「問掛」を行なう、聞き手を必要とする文である⁽⁸⁾と考える。また、感動と問掛とを区別することに合わせて、問掛に使用される広義感動詞を、特に「問掛詞」と呼ぶことにする。

以上、聞き手を必要としない文である感動と聞き手を必要とする文である問掛とが区別されることを述べた。本稿は、先述のとおり、感動詞について、その使いわけが話し手の「把握」の在り方との対応をもつと考えるものであるが、問掛詞についても、同様に考えられる。以下では、感動詞による感動および問掛詞による問掛について、「話し手が事態を把握できていない場合」と「話し手が事態を把握できている場合」とにわけて、考察を行なう。

六 感動詞による感動

六―一 話し手が事態を把握できていない場合の感動

次に示すのは、話し手（感動の主体）が事態を把握できていない場合の感動の例である。

(3) a (予想外の事態が発生した場面) 手近の東の方角にある、外濠稲荷の木立の中から、「おや、何んだ!」という声が出た。(『奥』)

b (突然部屋が真っ暗になった場面) わっ なんだ (『天』一)

c (未使用の花火が突然暴発した場面) きやつ なになに!? (『犬』四)

d (女の霊が現れた場面) 渾身の力をふりしぼって、久四郎は戸をおした。そのとたん、戸袋のすきまからひとりの女がとびだしてきて、久四郎に組みついた。「うわっ。」びっくりぎょうてんした久四郎が、思いきりつきとばすと、女はふつときえた。「な、なんだ、いまのは……?」(『て』)

森重(一九五二)は、「あな、面白。」「おや、あなたも来てたのですか。」「やれ、これで安心。」のような感動詞による感動の例について、「感情的な色合は種々であるが、一貫するものは理性的には対象の発見、意志的にはその驚嘆である」としたうえで「驚愕意外などの感情をあらはすとせられるものも対象の発見驚嘆に他ならない」と述べ、また、その「理性的」なものと「意志的」なものととの関係について「もと一なるものの両面である」「元来両者が融合的であり、場合によつてそのいづれかが表面化した意味となる」と述べる。(3 a ~ d)の「おや」「わっ」「きやつ」「うわっ」は、事態に対する「発見／驚嘆」を表わすものと考えられる⁽⁹⁾。なお、発見が表面化した例においては驚嘆が、驚嘆が表面化した例においては発見が、それぞれ裏面化したものとして存在すると考えられる。話し手が事態を把握できていない場合の感動に使用される現代語の感動詞の代表例としては、次の【一】が挙げられる。(i)は問掛詞としては使用されないものであり、(ii)は問掛詞としても使用されるものである。

【一】(i) いや(いやあ)／う(うう)／うえ(うええ)／うお(うおお)／うぎゃ(うぎゃあ)／うひゃ(うひゃあ)／うわ(うわあ)／きゃ(きゃあ)／ぎゃ(ぎゃあ)／ひ(ひい)／ひえ(ひええ)／ひゃ(ひゃあ)／ま(まあ)／わ(わあ)
あ

(ii) あ(ああ)⁽¹⁰⁾／あら(あら／あらら)／ありや(ありやりや)／あれ(あれれ)／うむ(ううむ)／うん(ううん)／え(ええ)／お(おお)／おや／は(はあ)／へ(へえ)／む(むう／むむ)／や(やあ／やや)／ん

六―二 話し手が事態を把握できている場合の感動

次に示すのは、話し手（感動の主体）が事態を把握できている場合の感動の例である。

- (4) a (雪が降っているのに気付いて) あら 雪… (|| 1 a)
- b (ハサミを探している場面) ハサミ… あつ さつき完治君に貸したんだ (『少』七)
- (5) a 「おおつ、血を吐かれた」諸人は驚いて、彼の体をかかえ上げ、山の下へ運んで行ったが、周瑜は気を失ってしまったものらしく途中も声すら出さなかった。(|| 1 b)
- b ほほう、こんな高級マンションに高校生になったばかりの女の子が一人暮らしとは。ワケありなんだろうな。(『涼』)
- c (英語で書かれた手紙を読んで) 「なるほど、英語だと、恥かしいことも、案外平気で書けるわけだな」(『そ』)
- d 「うむ、なにからなにまで、最新式に作ってある」塩田大尉は、感心しました。(『怪』)
- e (昼寝をするから静かにしてほしい、と母親が息子に頼む場面) 「だからなるべく静かにしててね」「うん」
「ふう やつとわかってくれたみたい」(|| 1 c)
- f (車が目的地に到着して) わーい ついたついたー (『ク』二)
- g 「時間が後れると霧が晴れてしまう」と熊八氏が心配していたが、山路が開けて一帯の谷を見渡した時に、
「ああ霧はもう晴れている」と落胆した。(|| 1 d)
- h (別のクラスの女子がお金を貸してほしいと頼んできた場面) ようするに、ぼくが汗みずたらしてバイトしてる

のを、そのでっかい黒目がちの目で見ていて、金がありそうだと踏んだのだ。なかなか筋の通った話だ。
いやはや、ひでえ自分勝手なヤツだなと呆れはしたが、ともかく、筋は通っていた。(『海』)

i (室内を飛びまわる蚊を駆除しそこねて) ち 逃がしたか(『ク』四)

(4 a・b) は、発見が表面化した——驚嘆が裏面化した——例である。話し手が事態を把握できている場合の感動における発見について、(4 a・b) における発見は、それぞれ、事態(雪が降っている)「さっき完治君にハサミを貸した」に対する「気付き」「思い出し」と呼べるであろう。そして、これら気付き・思い出しは、発見の分化として位置づけられる。これに対して、(5 a・i) は、驚嘆が表面化した——発見が裏面化した——例である。話し手が事態を把握できている場合の感動における驚嘆について、(5 a・i) における驚嘆は、それぞれ、事態(周瑜が血を吐いた)「高校生になったばかりの女の子が高級マンションで一人暮らしをしている」「恥ずかしいことも英語だと案外平気で書ける」「なにからなにまで最新式に作ってある」「自分の頼みを息子がやっとなにかわってくれた」「車が目的地に到着した」「霧がもう晴れている」「別のクラスの女子がひどく自分勝手である」「室内を飛びまわる蚊を駆除しそこねた」に対する「驚愕」「関心」「納得」「感心」「安堵」「歓喜」「落胆」「呆れ」「苛立ち」と呼べるであろう。そして、これら驚愕・関心・納得・感心・安堵・歓喜・落胆・呆れ・苛立ちとは、驚嘆の分化として位置づけられる。

ところで、感動詞によって表わされる発見の分化としての意味は、気付き・思い出しのいずれかとなるが、驚嘆の分化としての意味は、驚愕・苛立ちの九つに尽きるものでは決してない。しかし、驚嘆の分化としての意味について、個々の意味を明瞭に区別することは困難でありⁱⁱ⁾、また、それを網羅的に列挙することも困難である。それゆえに、感動詞によって表わされる驚嘆については、細かな意味分類を行なうのではなく、次のように、大きくわけて考えるのがよいと思われる。

・ A 話し手が事態を把握できていない場合の感動における驚嘆

・ B 話し手が事態を把握できている場合の感動における驚嘆

・ B 1 話し手によるプラス・マイナスの価値評価に関わらない驚嘆

・ B 2 話し手によるプラス・マイナスの価値評価に関わる驚嘆

・ B 2—1 話し手によるプラスの価値評価に伴う驚嘆

・ B 2—2 話し手によるマイナスの価値評価に伴う驚嘆

「B 1」は、話し手が事態に対してプラス・マイナスいずれの価値評価をも下していない場合に表わされるものであり、関心・驚愕・納得はここに属する。これに対して、「B 2」は、話し手が事態に対してプラス・マイナスいずれかの価値評価を下した場合に表わされるものである。すなわち、「B 2—1」は、話し手が事態に対してプラスの価値評価を下した場合に表わされるものであり、安堵・歓喜・感心はここに属する。また、「B 2—2」は、話し手が事態に対してマイナスの価値評価を下した場合に表わされるものであり、呆れ・苛立ち・落胆はここに属する。なお、「B」としての驚嘆の意味が表面化した感動詞句は、たとえば「血を吐かれた、おおっ」「こんな高級マンションに高校生になったばかりの女の子が一人暮らしとは、ほほう」「英語だと、恥かしいことも、案外平気で書けるわけだな、なるほど」「なにからなにまで、最新式に作ってある、うむ」「やっとわかってくれたみたい、ふう」「ついたついたー、わーい」「霧はもう晴れている、ああ」「ひでえ自分勝手なヤツだな、いやはや」「逃がしたか、ち」のように、それに欠如した対象的意味を補填する句の後に位置することもある¹²⁾。

話し手が事態を把握できている場合の感動に使用される現代語の感動詞の代表例としては、先の【一】および次の

【二】【三】【四】が挙げられる（i）（ii）の区別については、【一】と同様である）。

【二】(i) いやはや／なるほど(なある／なあるほど／なる／なるへそ)／なんと⁽¹³⁾／ははあ／ははん／ふう／ほう(ほう)／やれ⁽¹⁴⁾

(ii) さあ／さて／なに／はあん／はい／はて(はてな)／はてさて／ふむ(ふうむ)／ふん(ふうん)

【三】(i) しめた(しめしめ)／ばんざい／やった(やり)／よし(よっしゃ)／わあい

【四】(i) あいた(あた／あちゃあ)⁽¹⁵⁾／うげ(うげえ)／ええい／おえ(おええ)／くそ(くそったれ)⁽¹⁶⁾／け／げえ／げ(げ)／しまった／ち(ちい／ちえ／ちえ／ちよ)⁽¹⁸⁾／ちくしょう(こんちきしょう／こんちくしょう／ちきしょう)／とほほ／へん(へへん)／まったく／もう

【三】は、驚嘆としては先の「B2—1」のみを表わすものであり、【四】は、同じく「B2—2」のみを表わすものである。また、【三】【四】には、(ii)に当たる語がないようである⁽¹⁹⁾。一方、【一】【二】は、驚嘆として「B2—1」のみあるいは「B2—2」のみを表わすものではなく、ここには、(i)に当たる語と(ii)に当たる語との両方がみられる。

七 問掛詞による問掛

七—一 話し手が事態を把握できていない場合の問掛

次に示すのは、話し手(問掛の主体)が事態を把握できていない場合の問掛の例である。

(6) a だが、たった今、銀五郎の手で寝せつけられた多市は、何かを感じて、「おや?」と、胸を騒がした。
〔鳴〕

b (外に出てみると周囲の建物などが全てなくなり、辺り一面が水浸しになっていた、という異常な状況での第一声)

感動詞による感動について

「……は？」「なにコレ……？」（『漂』）

c 照準を合わせて、トリガーを引いた。が、鞆亜の銃声よりほんの少し早く、もう一発の銃声が響き、同時に左肩に強い衝撃と痛みが走った。——えっ、いったい何が……？ 理解が追いつかなかった。痛む肩に

目をやり、べったりと赤いペイントがついているのを見て、ようやく自分が撃たれたのだと理解した。

（『リ』）

（6 a ~ c）は、話し手が事態を把握できていないためになされる問掛、すなわち、いわば「一体何が起こっている（起こった）のか？」という問掛を表わすものである。そして、話し手が事態を把握できていない場合の問掛に使用される問掛詞は、先の【一】の（ii）である。

七— 話し手が事態を把握できている場合の問掛

次に示すのは、話し手（問掛の主体）が事態を把握できている場合の問掛の例である。

（7） a （死んだはずの母親の姿を見かけて） あ……？ お……おふくろ……？ （≡ 2 a）

b 「第一、やつは生きてはおらん。封印されたと聞いているぞ。」「で、ですからその封印が、解かれたと……」

「なに？」（『犬』二）

c 「野枝サマは、今、お父上が宗兵衛サンに頼まれて、伊都サンのゆくえを探してらっしゃるのをご存じで？」「えっ？ それ、本当でございますか？」（『旗』）

d 「——ちよっと、達郎！ そんなにガツガツ食べないでよ」「ん？ 何か言った？」（≡ 2 c）

（8） a 手紙を一通書き上げると、書かなかったことをいろいろと思い起こして「あれれ、どうしてあのことを伝

えなかったのだろう」と思うことがよくあります。(小)

b すると、どこからか、何かしきりに話をしているような声が聞える。「はてな、誰だろう？」と、佐々は廊下に立ちどまって耳をすました。(=2b)

c (眼鏡を探している場面)「おや? むむ? どこじゃな?」(『魔』二)

d (大音量の音楽が流れているディスコで)「おい、困るよ。どうやって踊ったらいいかよく知らないんだ」「えっ?」何て言ったの? 聞こえないわ」(=2d)

話し手が事態を把握できている場合の問掛は、大きく二つにわけられる。一つは、(7a~d)のような、聞き手が把握した事態と話し手が把握した事態(「死んだはずのおふくろがいる」「やつ^の封印が解かれた」「父が宗兵衛サンに頼まれて伊都サンのゆくえを探している」「相手が何か言った」との一致不一致の判定を求める問掛、換言すれば、話し手による把握が正しいものであるかどうかの判定を求める問掛を表わすものである⁸⁰)。いま一つは、(8a~d)のような、話し手が把握した事態(「なぜかあのことを伝えなかった」「誰かが話をしている」「眼鏡がどこかにある」「相手が何か言った」)における不定部の意味の補充を求める問掛(「あのことを伝えなかったのはなぜか?」「話をしているのは誰か?」「眼鏡はどこにあるのか?」「相手は何と言ったのか?」を表わすものである。そして、話し手が事態を把握できている場合の問掛に使用される問掛詞は、先の【一】の(ii)および【二】の(ii)である。

七―三 個々の問掛詞がもつ性質

先述のとおり、広義感動詞による文のうち、聞き手を必要とする文である呼掛・応答においては、属性の分化と待遇の分化との二つが発生し、聞き手を必要としない文である感動においては、属性の分化のみが発生する。また、

個々の呼掛詞・応答詞は、それぞれに属性・待遇の分化から生じる独自の性質をもち、個々の感動詞は、それぞれに属性の分化から生じる独自の性質をもつ。

問掛詞による問掛は、呼掛や応答と同様に、聞き手が必要とする文である。それゆえ、問掛においては、属性の分化と待遇の分化との二つが発生し、個々の問掛詞は、それぞれに属性・待遇の分化から生じる独自の性質をもつことになる。たとえば、問掛詞「あ（ああ）」は、「その使用者として男性が想定されやすく、基本的に対等以下の相手に対して用いる」という性質をもつが、この性質は、属性・待遇の分化から生じるものである。

八 ま と め

感動詞による感動は、「話し手が事態を把握できていない場合」と「話し手が事態を把握できている場合」とに大別され、ここで使用される感動詞は、話し手が事態を把握できているか否かにかかわらず使用可能なもの（一）と、話し手が事態を把握できている場合にのみ使用可能なもの（二）（三）（四）とにわけられる。問掛詞による問掛も、「話し手が事態を把握できていない場合」と「話し手が事態を把握できている場合」とに大別され、ここで使用される問掛詞もまた、話し手が事態を把握できているか否かにかかわらず使用可能なもの（一）の（ii）と、話し手が事態を把握できている場合にのみ使用可能なもの（二）の（ii）とにわけられる。

以上、本稿では、一般に感動詞による感動の例とされる文が、聞き手が必要としない文である「感動詞による感動」と聞き手が必要とする文である「問掛詞による問掛」とに区別されることを述べ、これらの文について、「事態」を対象とすること、および、感動詞・問掛詞の使いわけが話し手の「把握」の在り方との対応をもつことを確認しつつ、その体系を論じた。

註
(1)

「感動詞」「呼掛詞」「応答詞」という用語は、森重（一九五九）から借りたものである。

(2)

広義感動詞による文は、感動・呼掛・応答の三つに尽きるものではない。すなわち、少なくとも、荷物をもち上げる際に発せられる「せーの」「よいしょ」のような掛声や、相手を叱りつける際などに発せられる「こら」「これ」のような行動制御は、ここに加えられてよく、これらはともに、聞き手を必要とする文として位置づけられる（掛声」文については拙稿（二〇一七）を、「行動制御」文については拙稿（二〇二〇）を、それぞれ参照）。しかし、議論が必要以上に複雑化することを避けるため、本稿では、感動・呼掛・応答という代表的な三つのみを取りあげることにする。

(3)

この段落の内容は、拙稿（二〇一六・二〇一八・二〇二〇）が述べることを本稿に整理しつつ、その細部を改めたものである。

(4)

「我」「汝」は、拙稿（二〇一五）による用語であり、拙稿（二〇一五）は、呼掛において、「話し手」と呼ばれてきたものを、言語場におけるものである「我」と言語場構成以前におけるものである「呼掛主体」とにわけ、同様に、「聞き手」と呼ばれてきたものを、言語場におけるものである「汝」と言語場構成以前におけるものである「呼掛対象」とにわけ。また、「指示」とは「傍にいる相手にハンカチを手渡す際に」ほら」のような例に認められる機能であり、「気付け・思い出させ」とは「ほら、あそこに花屋があるよ」「ほら、昔、駅前に和菓子屋があっただろう」のような例に認められる機能であり、「促し」とは「ほら、早く行け」のような例に認められる機能である（これらの機能の詳細については、拙稿（二〇一六）およびこれに微修正を施した拙稿（二〇一八）を参照）。なお、ここに示す呼掛詞は、その変異形と考えられるものも含んでいる。すなわち、たとえばここでの「おい」は、「おいおい」「おおい」などをも含んでいる、ということである。ちなみに、拙稿（二〇二〇）が述べるように、「こら」「これ」による文は、「呼掛」ではなく「行動制御」を行なうものと考えられ、また、俗語ではあるが、「おら」も、第二種呼掛詞としての機能（「我」・「汝」の言語場を構成する「機能＋指示／気付け・思い出させ／促し」機能）をもつと考えられる。

(5)

大鹿（二〇一四）は、「文は「こと」を表現したものであり、それが文の意味である」とし、文が表わしている「こと」には、「文の形式によって表されている「こと」という側面と「表現するという行為自体が表している「こと」という側面との二つの側面がある」と述べる。引用中の「行為の意味」とは後者の側面をいうものであり、「内容的意味」とは前者の側面をいうものである。また、「受容」とは、応答の主体が応答の対象となる文の「行為の意味」を受け

入れることをいうものである。次に、「はい」系とは応答詞「ああ」「うむ」「うん」「ええ」「おう」「はあ」「はい」「はっ」「へい」「ほい」を、「いいえ」系とは応答詞「いいえ」「いいや」「いえ」「いや」「ううん」を、「さあ」系とは応答詞「うーむ」「うーん」「さあ」「さて」「はて」を、それぞれまとめて呼ぶものである（なお、ここに示す応答詞は、その変異形と考えられるものも含んでいる。すなわち、たとえばここでの「はい」は、「はあい」「はいはい」などをも含んでいる、ということである）。そして、「同意」「不同意」とは、「二類」の応答において「はい」系・「いいえ」系が表わす意味のそれぞれをいうものであり、一般に「肯定」「否定」と呼ばれるものである。

(6) 用例の出典は、稿末の略記に従って示す。

(7) たとえば、森山（一九九六）は、「あ？」「あれ？」「え？」「おや？」について、「もつとも未分化な疑問文だと言うことができる」と述べる。また、かかる例は、「疑問」についての研究においても取りあげられることがある。たとえば、宮地（一九七九）は、疑問表現の最も単純な段階として「たんに自分のところに湧くうたがいの気もちそのものの直接的表現」であり「疑問表現のすべてをつらぬく根本的な原始的な性格」をもつものである「疑問兆候」を設定し、「え？」「はてな？」を、その例として挙げる。

(8) 典型的な疑問文（いわゆる真偽疑問文や不定疑問文）は、行為として「問掛」や「質問」を行なうものと考えられる。本稿が（2a~d）のような例を「問掛」とするのは、これによる。

(9) 森重（一九五二）が「発見／驚嘆」を表わすとするのは、「ああ、雨だ。」のような、感動詞句が、それに欠如した対象の意味を補填する句の前に位置する場合についてであり、「雨だ、ああ。」のような、感動詞句が、それに欠如した対象の意味を補填する句の後に位置する場合については、「確認／詠嘆」を表わすとする（「確認」は「理性的」なものと考え、「詠嘆」は「意志的」なものと考えられる）。ここでは、（3a~d）のような例が「発見／驚嘆」を表わすことが確認できればよく、「雨だ、ああ。」のような例については、後述する。

(10) 「高低高」の音調で発話される場合の感動詞「あああ」（「あーあ」と表記されることが多い）は、話し手が事態を把握できている場合にのみ使用可能であり、「あーあ、また失敗した。」のように、驚嘆としては、後述する「B2-2」（「話し手が事態に対してマイナスの価値評価を下した場合に表わされる、呆れ・苛立ち・落胆といった意味）のみを表わす。かかる「あーあ」については、石川（二〇一四）が「あーあ」は「高低高（低）」というアクセントを持った独立した語で

はなく、感動詞「あ（あ）」の発話上のイントネーション（およびのぼし）の問題である」と述べるように、感動詞「あ（ああ）」に含めて考えられる。

(11) 感動詞が表わす意味について、金水（一九八三）は、次のように述べる。

反応のあり方や使用場面によって驚愕・驚嘆・感心・疑問・当惑・困惑・嘆息・落胆・気付き・安堵・反発などと呼び分けられるが、それぞれが明瞭に区別できるという訳ではない。

右に列挙される意味のうち「驚愕」「驚嘆」「感心」「当惑」「困惑」「嘆息」「落胆」「安堵」「反発」が、本稿にいう「驚嘆」およびその分化に当たるものである。なお、「気付き」は本稿にいう「発見」またはその分化に相当するものであり、「疑問」は本稿にいう「問掛」を指すものと考えられる。

(12) これについては、既に類似する指摘がある。たとえば、森重（一九五二）は、「後悔落胆などは事後に対象が発見せられる場合であるから、その対象を自覚する形の「引用者註・感動詞句が、それに欠如した対象的意味を補填する句の後に位置する」詠嘆となることがある」と述べる。また、金田（二〇一五）は、感動詞による感動を、「発見」「遭遇」といった意味を表わす「（驚きタイプ）」と「安堵」「感心」「嫌悪」といった意味を表わす「（詠嘆タイプ）」とにわけたうえで、前者について「文頭以外に現れることはない」と述べ、後者について「（驚きタイプ）」の感動詞に比べて文末におかれてもいくらか自然である」と述べる。

(13) 感動詞「なんと」による文について、笹井（二〇〇六）は、次のように述べる——引用中の「「なんと」型感動文」は、笹井（二〇〇五・二〇〇六）による用語であり、「なんと美しい花だろう！」のような、「なんと（なんて・なんとという・なんていう）だろう（か・だ・ゆ）」という形式をもつ感動文をいうものである——。

町中でよく見られる宣伝文句「なんと！ 1980円！」などの「なんと」は、もはや感動詞として機能していると考えられるが、このような使われ方は「なんと」型感動文の「なんと」を前提としているであろう。

(14) 感動詞「やれ」は、現代語においては「やれやれ」の語形で使用されることが多い。なお、同様の現象は呼掛詞にもみられ、呼掛詞「もし」は、現代語においては「もしもし」の語形で使用されることが多い。

(15) 感動詞「あいた」は、感動詞「あ」＋形容詞語幹「いた（痛）」が一語の感動詞となったものである。また、感動詞「あた／あちゃあ」も、「あいた」と同様に、「あ＋いた」に由来をもつものと考えられる。

感動詞による感動について

(16) 感動詞「くそ」および「ちくしょう」による文について、笹井(二〇一七)は、次のように述べる——引用中の「レッテル貼り文」は、笹井(二〇一七)による用語であり、人を対象とする「ばか者!」「この見栄っ張り!」や物を対象とする「おんぼろ車!」「このボンコツ!」のような、「性質、特徴、属性などを示す要素+人や物を示す要素」という構造をもつ名詞(≒レッテル)から成り立つ体言骨子の文で、対象への価値評価にともなう怒りや呆れ、嘲り、蔑み、嫌悪、侮蔑などの情意を表出することを専らとする文、即ち悪態をつく文」をいうものである——。

「くそっ!」「ちくしょう!」なども日常よく使われる。これらはもはや感動詞として機能していると考えられるが、もとはレッテル貼り文であったものが実質的なレッテルとしての意味を失い、話し手の情意のみを表出するようになったものである。

また、感動詞「くそったれ」「こんちきしょう／こんちくしょう／ちきしょう」による文についても、同様に、「もとはレッテル貼り文であったものが実質的なレッテルとしての意味を失い、話し手の情意のみを表出するようになったもの」と分析できる。

(17) 感動詞「げ(げえ／げげ)」および「うげ(うげえ)」は、「げ」を核とする一群であり、体内のものを吐出する行為に由来するものである(なお、感動詞「げ」については、富樫(二〇一三・二〇一五)が分析を行なっている)。また、右の一群には含まれないものの、感動詞「おえ(おええ)」も、同じく体内のものを吐出する行為に由来するものである(ちなみに、感動詞「うえ(うええ)」は、「おえ(おええ)」に似ているが、驚嘆として「B2-2」のみを表わすものではない)。

(18) 感動詞「ち(ちい／ちえ／ちえ／ちよ)」は、苛立ちなどを表わす舌打ち行為に由来するものである。

(19) 森山・張(二〇〇二)は、独自の広義感動詞分類を行なっており、「評価を表示するタイプ(疑問上昇不可、評価が分化)」である「価値評価型」の例として、「くそ」「しめた」「やった」「よし」を挙げる。これらは、本稿が【三】の(i)および【四】の(i)に属する感動詞として位置づけるものである(ただし、本稿では、【三】の(i)および【四】の(i)に属する感動詞が表わすのは、「評価」そのものではなく、歓喜や苛立ちといった、「評価」に伴う驚嘆としての意味であると考えている)。

(20) (7a-d) についての解釈は、大鹿(一九九〇)の論を参考にして、本稿に行なったものである。

参考文献

- 浅田秀子（二〇一七）『現代感動詞用法辞典』東京堂出版
- 石川創（二〇一四）「感動詞の認識に関する音声上の問題について」『駒沢女子大学研究紀要』二二・駒沢女子大学
- 大鹿薫久（一九八八）「感動文の構造——句と文についての把握——」（あめつち会（編）『ことばとことのは』五・和泉書院）
- 大鹿薫久（一九八九）「感動文の構造（承前）——句と文についての把握——」（あめつち会（編）『ことばとことのは』六・和泉書院）
- 大鹿薫久（一九九〇）「疑問文の解釈」『語文』五五・大阪大学国語国文学会
- 大鹿薫久（二〇一四）「文」（佐藤武義・前田富祺（編集代表）『日本語大事典』朝倉書店）
- 金田純平（二〇一五）「文末の感動詞・間投詞…感動詞・間投詞対照を視野に入れて」（友定賢治（編）『感動詞の言語学』ひつじ書房）
- 金水敏（一九八三）「感動詞」（大曾根章介・久保田淳・檜谷昭彦・堀内秀晃・三木紀人・山口明穂（編）『研究資料日本古典文学 第十二巻 文法 付辞書』明治書院）
- 笹井香（二〇〇五）「現代語の感動喚体句の構造と形式」『日本文藝研究』五七—二・関西学院大学日文学会
- 笹井香（二〇〇六）「現代語の感動文の構造——「なんと」型感動文の構造をめぐる——」（日本語学会（編）『日本語の研究』二—・武蔵野書院）
- 笹井香（二〇一七）「レットテル貼り文という文」（日本語学会（編）『日本語の研究』一三—四・武蔵野書院）
- 富樫純一（二〇一三）「感動詞「げっ」の意味分析」『日本文学研究』五二・大東文化大学日文学会
- 富樫純一（二〇一五）「予想外と想定外…感動詞「げっ」の分析を中心に」（友定賢治（編）『感動詞の言語学』ひつじ書房）
- 宮地裕（一九七九）『新版文論』明治書院
- 森重敏（一九五二）「応答詞とその分化」『国語国文』二二—二・京都大学国文学会
- 森重敏（一九五九）『日本文法通論』風間書房
- 森山卓郎（一九九六）「情動的感動詞考」『語文』六五・大阪大学国語国文学会
- 森山卓郎（二〇一四）「応答」（日本語文法学会（編）『日本語文法事典』大修館書店）

森山卓郎・張敬茹（二〇〇二）「動作発動の感動詞「さあ」「それ」をめぐる——日中対照的観点も含めて——」（日本語文法学会（編）『日本語文法』二一・二・くろしお出版）

六城雅章（二〇一五）「名詞による呼掛について——喚体論の視点から——」（『日本文藝研究』六七——・関西学院大学日文学会）

六城雅章（二〇一六）「呼掛詞による呼掛について」（『日本文藝研究』六七——・六八——・関西学院大学日文学会）

六城雅章（二〇一七）「掛声について」（『日本文藝研究』六九——・関西学院大学日文学会）

六城雅章（二〇一八）「応答詞による応答について——呼掛に対する応答の場合——」（『日本文藝研究』七〇——・関西学院大学日文学会）

六城雅章（二〇二〇）「感動詞「おら」の機能について」（『日本文藝研究』七一——・関西学院大学日文学会）

用例出典

『少』＝森下裕美『少年アシベ』七／三＝吉川英治『三国志』／ク＝臼井儀人『クレヨンしんちゃん』二・四／別＝高浜虚子『別府温泉』／犬＝高橋留美子『犬夜叉』二・四／火＝海野十三『火星兵团』／危＝赤川次郎『危険な相続人』下／『脳』＝太田健一『脳細胞日記』／奥＝国枝史郎『奥さんの家出』／天＝福本伸行『天和通りの快男児』一／て＝三田村信行『てんぐの人さらい』／涼＝谷川流『涼宮ハルヒの憂鬱』／そ＝織田作之助『それでも私は行く』／怪＝海野十三『怪塔王』／海＝氷室冴子『海がきこえる』／鳴＝吉川英治『鳴門秘帖』／漂＝押見修造『漂流ネットカフェ』一／リ＝おかざき登『リトルアーモリー』だから、少女は撃鉄を起こす／旗＝鈴木晴世『旗本伝八郎飄々日記 春の足袋』／小＝フランシス・ホジソン・バーネット（畔柳和代・訳）『小公女』／魔＝エメラルド・エバーハート（岡田好恵・訳）『魔法の国のかわいいバレリーナ』一